

自然

雷神様の戒め、

福島県の南西部、伊南川いながわの支流に黒谷川という溪流釣りのメッカがある。大小の滝を巻き、胸までの淵を泳ぎ渡り、土地の人が繰り貫いた岩小屋の隧道を抜け、終日ただ黙々と歩く。元々はこの溪も地元の人が初夏に山菜を採りに入る溪なのである。

大岩魚を夢見る釣りキチたちは、この危険な冒険を途中で捨てることをしなかった。釣り人は自分が随神かんながらにまるごと抱かれてなどという情緒に酔うことも、虎口が待っていることなども意に介さず、只管、源流に引き寄せられて行く。この溪の源流は坪入山（一七七四米）であるが、我々の計画は途中の小手沢から朝日山を越え、倉谷川を釣り下るという無謀なものだったのである。我々の軽卒さはこればかりではなく、気象予報も天気図も気にすることなく、ここに連休がとれるからというのが唯一の理由であった。

やがて、小手沢と崩れ滝の分岐点に着いた時、あたりの空気が急に冷ややかになり、夕暮れのような暗さになって来た。その時、雷がいきなり光の柱となって落下したのである。続いて大粒の雨が降り出し、空は墨を流したような色となり、辺りは俄かに夕闇となった。ゼウスの神のご機嫌が悪かったのか、猛烈な雷雨に加え落雷の

立錐となったのである。雷光は間断なく我々を狙うかのように前後に落下した。溪はこの雨で間もなく増水するに違いない。いや、そんなことより、次の雷鳴は自分の頭上かも知れないのだ。落石のなことを神だのみに、それぞれは流れの浅い窪地に身を伏せるのがやっとであった。雷光と雷鳴の間隔はさらに短くなり、我々は天地が裂けるような音で、今ある生命を確認するしかなかった。人間は絶体絶命の危機を感じた時、過去のすべてが一瞬で見えると聞いたことがある。

私が幼かった頃、よく祖母に連れられて郡山市の「如宝寺」というお寺にお参りに行った。長い石段を登ると山門があり、南向きの左右には阿吽あうんの仁王像、それを背にして北向きに風神、雷神の像があったのである。私はその像を見るのが怖かったのだが、祖母に促されるまま掌を合わせ、その場から急いで立ち去ったものであった。その恐ろしい形相の雷神がこの雷雨の中で見えたのである。私は腹這いのまま、思わずその如宝寺の雷神に無意識に手を合わせていた。祈りが届いたのか雷神の乗る雷雲はは三十分ほどで遠ざかり、一行四人は途中の増水した小沢を巻きながら、怪我も無く下山できたのである。当然のことながらその後の予定はすべてないものになった

が、もし、雷雨がなく強行していたら、若者揃いとはいえこの難コースで、新聞を賑わし世論の非難の的になっていたことを考えるとゾツとする。雷神さまが強行を止めてくれたとしか思われない。

以来、常に天気図や雲行きに関心が向き、海洋予報まで出来るようになった小型船舶免許取得のは、あの時の雷神さまの恐怖が切っ掛けになったことは確かである。生き物のように変わる雲や風、日の出、日没、月の変化を見て、古代の人々が神を人間が如何ともし難い絶対神と考えたのは無理も無いことであつたろう。

ところで、雷神は北野天神の眷属けんぞくとされているはずである。それが真言宗の寺院の山門に祀られているのは不思議なことであるが、これこそが聖徳太子が考案した「神仏習合」だったのだ。それを思うと我々はこのとき、絶対絶命の中で神仏に護られたのであろう。聖徳太子といえ、日本人にはあり難い永く紙幣の肖像にまでなった馴染み深い人であるが、この人の賢さは内外の学問に通じていたばかりではなく、自らは天皇を辞退し摂政として国難にあたったことにある。日本に初めて十七条憲法を制定し、仏教興隆に力を尽くし、遣隋使を派遣したことは余りにも有名である。太子がなぜ天皇にならなかったかは本人以外分析のしようがないが、私の大胆な推

理で考えると、天皇に在るより摂政政治の実務家の方が日本を変え易いと考えたのではないのだろうか。歴史を繙解くまでもなく名君には知恵者のNO2が必ず存在した。わが国の戦国時代で言えば、豊臣秀吉には黒田勘兵衛、武田信玄には竹中半兵衛、上杉景勝には直江兼続、中国の歴史から拾えば春秋時代に周公に仕えた呂尚（太公望）や管仲、三国時代に蜀の劉備玄德に仕えた諸葛亮（孔明）その他、歴史に名を留めることはなかったものの、その人無くしては一国の危機を乗り切ることの出来なかったNO2が大勢存在したのである。これらの中で歴史的な思想の転換者は、聖徳太子の「神仏習合」であつたろう。

我々は現在でも進退窮まったとき「神様、仏様」と掌を合わせたり、思うように事が運ばなかった時などは「神も仏もあるものか!」などと言うが、そもそも「神」と「仏」とはどのように違い、これをどのような概念で捉えれば良いのだろうか。一般論で括れば人類の歴史は、神の存在の認知から始まったといってもよい。神は人間をはるかに超えた力と知恵を不意に具現化して見せたからである。

これに対して人間は、ただ畏れ伏し祈るしか術はなかつた。^{すべ}しかも、神は姿も見せず現象だけを残した。

しかし、仏教の始祖は実在の人間であり、不思議や奇跡には後世の伝説や理論が加わったとしても今日に伝わる教説には、人の心を動かす説得力を持っている。聖徳太子はこの点にいち早く着目し、「神」とは人間が代償を求めないひたすら帰順と祭祀の場とし、その襖みそぎの場での祈祷はこころ浄める手段と考えたのかも知れない。それに対して「仏」は人間を現世の究極で救い上げるものではなく、人間自身が自らに誓いを立て、己を磨くために、人間本来の「無」やそこに至る「空」を求めるものと聖徳太子は気づいたのではないのだろうか。民衆がそれぞれ土着の信仰で自分たちの神を信仰し、中央の意に添わず、さらに、隣国朝鮮が三国に分かれて相争う様子を見て、国をまとめるために十七条憲法を制定し、先進国の隋の制度を導入しようとした発想は、NO2にしか出来ない卓見であったというべきであろう。

恐ろしい形相の雷神さまは、粹な計らいをするものである。日頃理屈を捏ねてばかりいる不信仰者に「神」や「仏」について深く考えさせ、聖徳太子にまで思考を敷衍ふえんさせるとは、雷神さまは永い年月、埃にまみれてただ立っていたわけではなかったのである。